

五択問題で語られる基礎医学とは

医師国家試験は、日本の医学生にとって、最初の到達点である。一方で、この到達時の医科系大学における合格率は一つの客観的評価基準となっており、それ故、この合格率を高めることが医学教育の“究極”の目標と考えておられる人も多いのではないだろうか。少なくとも、国立大学法人の統廃合の話が出るたびにこの合格率に神経質にならざるを得ない状況にあるし、大学入試の難易ランキングにも影響する。

医師国家試験は四半世紀以上前から五択問題として出題されており、時代の変遷にもかかわらず、客観的評価（採点）を短時間で終了できることを楯に根本的に変革の手が差し延べられていない。小生が在学中の頃は基礎医学や社会医学の試験は記述形式や口頭試問であり、6年次の卒業試験においても外科系の多くは記述問題であり、五択準抛版を用いていたのは内科・小児科系であったように記憶している。従って、五択問題に曝露されたのは約半年間であった。そして、記述問題の客観性が時折問題視されたが、明快な不合格理由が担当教員から述べられれば不合格学生も不本意ながら納得した。

最近、彼方此方の医科系大学で教養・一般教育を除く全ての医学教育成果を五択問題形式で評価し始めている。この構想は早期より医師国家試験に慣らせるための心温まる配慮だという。しかしながら、5年間も“洗脳”され続けると、絶えず脳裏に五択を浮かべ、その選択肢のどれが正しいかと自問するようになってしまわないだろうか。ましてや、そのような将来の医師像を考えると悪寒

すら走る。正しい診断名が五択の中に浮かんでいる間は良いかもしれないが、実は6番目や7番目の選択肢があり、偶然6番目が正答だとすると、その医師は誤診することになる。また、五択問題で洗脳されることによって、患者に病名や治療法を論理的に説明する能力や新しい発見に繋がる想像力を消失してしまう恐れも大いにありうる。

基礎医学は、各々が独自の学問体系を持ち、臨床医学における病態解明の基礎および方法論を提供している。そして、病名と病態生理を正確に理解すれば、それに伴う臨床症状も治療法も連想できるはずである。したがって、これらを五択に置き換えることは学問を歪めることに繋がりがかねないし、そのような五択問題の丸暗記は深遠な学問体系の真髄を理解することもないまま、「薄っぺらな知識」の習得に帰着する。このような弊害を避けるためにも、各々の学問に合致した試験形式がそのまま継続されるべきである。

情報化社会の浸透により、多くの人が机上のコンピュータで必要な知識や情報が得られるようになった。このためか、多くの医学生のレポートは複数の検索記事の詰合せであり、学生自身の言葉や発想で綴られたものは僅少であるように思える。また、分厚い内科学書を最初から最後まで精読する医学生は大幅に減り、必要最小限のキーワードのみが羅列された薄っぺらな教科書ほど人気が高いという。これらを総合すると、将来医師を目指す学生の五択問題による洗脳期間は短い方が良く、3年間でも長すぎるかもしれないと思うのは心配性の浅知恵であろうか。